# 第六講　論理的文章の読解⑤

## Step 1

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「使い続けるにつれて美しくなる」なんていうと、ふつうは経年変化の味わいを楽しむ骨董（こっとう）的なイメージが連想されるかと思いますが、もう少しそれより手前の部分を考えてみましょう。

「使う」、「使いこなす」という言い方がありますが、これは「見る」という作業とセットのいとなみです。柳（やなぎ）はそれを①「用の美」という言葉で表現しました。

柳は従来の美しさの価値基準の中で欠けていたものとして、用の世界の意義を唱えました。「用」とは「使用」の「用」です。単に見て観賞するのではなく、使用して見出（みいだ）される美しさがあると考えたのです。しかし、そのことは単に美の新しい領域を開拓したということに尽きるわけではありません。もう少し広い意味で、美だけでなく、様々な意味での生活の全体性の回復というのが民藝（みんげい）の「用の美」という言葉の中に込められているのではないでしょうか。新しい美の範疇（はんちゅう）としての「用の美」ではなくて、生活あるいは人間存在の全体性の回復です。そういう意味で、用の美とは、使うことと見ることの一体化として理解することができるでしょう。

「使う」というのは時間の経過を念頭に置いている行為です。様々なシチュエーション、バリエーションがあります。「使う」ときには、一つの目的に対して一つの道具と考えがちですが、一つの物が様々な用途を秘めていたり、あるいは同じ用途がいろんな物に解放されていたり、単なる一対一の関係性ではなくて、いろんなバリエーションを秘めた世界です。それを可能にしているのは時間という軸です。たとえば、かつてはAという用途に使われたものが、あるときにBという用途を発見されることで、さらに増幅された物の見方が培（つちか）われるようになることもあります。つまり、発見の過程、プロセスが「使う」「使いこなす」ということです。

それをソフィスティケートしたのが、茶道のいわゆる「見立て」文化でしょう。農家が種を保存するために使っていた壺（つぼ）が、美しい水指（みずさし）として見立てられるとか、そういった時間軸上のズレみたいなものが出て来ることがあります。

用の美は、言葉としては柳によって広められたものですが、その発想自体は、柳自身が繰り返し言及しているように、実は茶道において体系化されたものとしてありました。お茶の眼目の一つは物を使いこなすということです。単に作法や平面的な茶室の美しさではなくて、その中で物が物として生き生きしてくるために、使うという行為の意義が問わ②れてきました。ただし、それはあくまで茶室という非日常的な空間に閉じ込められていました。民藝は、それを日常化したということができるでしょう。

一方で、使いこなすということは、人と物との関係の親密さを表すものでもあります。例えば、簡単な例でいうと、メガネをかけているときに、メガネのことを気にする人っていません。物の機能性が本当に発揮されているときっていうのは、その存在が意識にのぼらないくらいに自分にフィットしている。

柳と同年生まれの思想家マルティン・ハイデガーもまた、こうした日常の物との関わりの本質を追究しました。彼の道具論にならうわけではありませんが、道具という、物として人間が最も身近に接している存在というのは、実は日常的には意識にのぼっていません。距離的には自分から最も近いところにあるのですが、意識の部分では、むしろ忘れられているくらいに身近な存在。むしろそれくらいまで使いこなさないと、物の本当の価値は見えてこない。

「用の美」というのは裏腹で、「美」といってしまうと、常にその美しさを愛（め）でていないといけないとか、ある種、［③］、対象化しているイメージがありますが、実はそういうことではなくて、どれだけその美が忘れられているかに本義があるのです。

その発想で考えた場合、誰か他人が与えた物の役割、物の意味付けに束縛されないで、自分と物との距離感をゼロから取り戻すことで、見立て的な使いこなしが可能になってくると思います。④与えられた、規格化された距離感でしか物と出会えないのであれば、新しい意味付けなんて不可能になります。自分にフィットした自分の新しい距離感ということを念頭に置いたとき、同じ物が別の意味付けや用途をもつことも可能になってくるし、そういう自由な広がりが出て来る。

それはもちろん、物理的に近ければいいという問題ではなくて、自分との親密さの問題であり、「用の美」もつまるところは、さきほどの自己化ということにつながります。

（鞍田　崇「使い続けるにつれて美しくなる」より）

（注）　柳＝柳宗悦（むねよし）。思想家、美術評論家。
民藝＝民衆の生活の中から生まれ、その地方に伝えられてきた実用的な工芸。
範疇＝領域。
ソフィスティケートした＝洗練した。

1　次のうち、①「用の美」について本文中で述べられていることがらとして、最も適しているものはどれか。一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア　「用の美」は、従来の美しさの価値基準の中で欠けていた考え方であり、人間存在の全体性を回復することによって一般に広まった概念である。
イ　「用の美」は、日常生活の中で見出される美であり、広々とした空間に置かれることで物が生き生きとする様子をとらえた新たな美の領域である。
ウ　「用の美」は、使用される中で見出される美のことであり、新たな美の領域を開拓しただけでなく、生活の全体性の回復にもつながる発想である。
エ　「用の美」は、使うことと見ることが一体化した考え方であり、物を使いこなそうとする茶道の本義から柳が着想を得て体系化したものである。

| |
|---|
| ア　イ　ウ　エ |

2　次のうち、本文中の②れと同じ意味で使われている助動詞を含む一文を一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア　私ならこの壁を越えられる。　イ　道に捨てられているごみを拾う。
ウ　先生は何時に出発されますか。　エ　昔のことが自然と思い出された。

（ア　イ　ウ　エ）

3　本文中の［③］には、「対象化」と意味の近いことばが入る。次のうち、［③］に入れるのに最も適していることばはどれか。一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア　客観化　イ　実用化　ウ　活性化　エ　多様化

（ア　イ　ウ　エ）

4　④与えられた、規格化された距離感でしか物と出会えないとあるが、これは本文中ではどのようなことだと述べられているか。その内容についてまとめた次の文の［a］、［b］に入れるのに最も適しているひとつづきのことばを、本文中から抜き出しなさい。ただし、［a］は**七字**、［b］は**十九字**で抜き出すこと。

ある物とその用途とが［a］にあると考え、物を使うときには［b］でしか物をとらえることができないということ。

a（□□□□□□□）
b（□□□□□□□□□□□□□□□□□□□）

5　本文中で筆者は、物を「使いこなす」とはどのようにすることであると述べているか。その内容をまとめた次の文の［　　］に入る内容を、「発見」「親密」という二語を用いて、七十五字程度で書きなさい。ただし、解答するときには、これらのことばにかぎかっこ（「　」）を付ける必要はない。

物を使いこなすとは、［　　］ということである。

【大阪府】

**Step 2・3**

## 二

次の文章を読んで、〔問1〕～〔問6〕に答えなさい。※印には（注）がある。

> 布について研究をしていた筆者は、鳥取市（とっとりし）で一人の紙漉（す）き職人と知り合った。戦後、工業化の波が押し寄せる中で、その職人は、手漉き和紙の仕事を時代遅れと考え、やめようとしたこともあった。しかし、「和紙は美しい」と考える人がいることを知って、この仕事を続けていこうと決意し、手漉き和紙と機械漉き和紙とを併存させ、技術保存と経営を両立させた。筆者は、その職人の話を聞く中で、「手仕事」について考えをめぐらせた。

この地域に来るようになって、かつては多くの村で布の手仕事と紙漉きの手仕事が共存していたのではないか、と思うようになった。少なくとも職人さんたちにとって、布であろうと紙であろうと、「手仕事」というA<u>価値観</u>は今や無視することができない。この紙漉きの工房で目にし、手に触れ、職人さんから話を聞くたびに、私は「手仕事とは何か」について、単に本を読む時とは違った考えを獲得する。

まず第一に、「手仕事」とは手のする仕事である以上に、「身体」の仕事である。ある時職人さんが流し漉きに使う木製の水槽を背に、「結局機械ではできないからね」とぽつりと言った。どういう意味かと思い、問いを重ねてゆくと、つまりこういうことだった。流し漉き（この方法は日本独特のもの）をおこなう時は、網を張った枠を両手でつかんで、水の中で何度も前後に振る。腰を軸にしたたいへんな仕事だ。時間もかかる。そこで、これを機械化してみようとした。前後に振るのだから、枠をつかんで前後に振る機械さえ作ればいいのである。まったく同じ材料で機械にやらせてみた。しかし、できあがった紙を破ってみて驚いたという。見た目は変わらない。一方向にも強い。しかし他の方向から切ると、簡単に破れてしまうのだ。手で漉いた紙は、どこから破こうとしても簡単に破くことはできない。手漉き和紙で作った江戸の本を見ている私にも、その「B<u>容易には破けない</u>」という感覚がわかる。

なぜこういうことになるのか。人間は腕だけ前後に動かしているつもりでも、じつは身体全体が左右にも上下にも斜めにも、微妙に動

いているのである。紙の繊維は動きによってからまってゆく。あらゆる方向に動く繊維はあらゆる方向にからみ合い、一方向にしか動かない繊維は一方向にしかからみ合わない。「手仕事」とはつまり手の仕事ではなく、全身のしている仕事なのである。

またこういうことでもあった。前後に動く機械が枠を動かしても、そこには眼がついていない。たとえカメラをつけたとしても、何を見るべきかをレンズは知らない。しかし職人は腕を動かしながら、水の中で浮いたり沈んだりしている紙の繊維と、それ以外の要らないごみ類を見分けているのだという。そして水の中を上下させて、要らないものが枠に入らないよう、自然に避けている。この動きは機械にとっては不可能に近いが、人間にとってはさほどの苦労ではない。

この、あらゆる方向に不規則に動きながら、小さな不要物を見分けて避ける、という仕事を機械にやらせたらどうなるか。今のコンピュータ技術ならあるていど可能かも知れない。しかしとてつもない費用がかかる。機械化の目的はコストダウンであるはずなので、研究開発と設備導入に費用がかかることは、仕事として何の［　　］もないことになる、と。職人さんはそう話す。

第二に、「手仕事」とは自然力を征服することではなくて、Ｃ自然の偶然性に身をゆだねることである。どんなに熟練しても自然の不規則性を除くことはできず、職人はむしろそのことを「もの」の中に、「もの」の個性として取り込んでしまう。

たとえば、様々な段階が機械化可能である。紙漉きの場合、紙を漉き上げると、その次には水を切る、乾かす、という作業がある。水を切るには重ねた紙の上に板を置き、石を置いて何日か放置する。もっと早くやりたいなら、いっきに押すためのプレス機を使う。しかし、このようにして押す時間を短縮すればするほど、紙は柔らかさを失い、一様になる。

干す時には、江戸時代だったら板に張って天日で乾かす。今では、巨大なステンレス板を熱して、そこに貼り付ける。これもまた、時間が短縮されたぶんだけ、紙は風合いを失う。このような機械化のプロセスが各段階で重なってゆけば、当然、そこにはまったく違うものが現れるのである。その違いは、一方が空気の湿気や風や石の重さや太陽の状態など、コントロールしきれないものに紙が身をゆだねている状態である。その結果として紙のもつ風合いつまり個性が現れるのだが、プレス機とステンレス板を使うことで、その風合いは一様になるのだ。

このことは布の場合にはもっと顕著だ。糸を紡(つむ)ぎ出す段階でそれが「手紡ぎ」であるなら、すでに人間の身体の微細なリズムによるムラが生じている。機織りの段階でそれが「手織り」であるなら、一回ごとの力のいれ具合の不規則性に左右されて、糸の間隔はムラが出

る。さらに糸や布の染色段階では、それが植物染料であるなら、使う個々の木や草の生産地、育ち具合、個性、煮た時間、煮た時の燃料の種類、染色した季節や時間帯、※媒染の量、漬けた時間と回数によって、同じものが二度とできないほどの違いを生じる。すべて、ものごとが「自然」の側にゆだねられているからであり、手仕事はそれを避けようがない。

第三に、「手仕事」とは、自然とひとりの人間のかかわりによって、あらゆる物を生み出すことのできる仕事をいう。あいだに他の何ものの介在も必要とせず、一個の人間が自然に立ち向かうことで充分、ものを作り出すことのできる、Dその方法をいうのである。紙漉きの職人さんが、「僕が無人島に漂流したら、きっと紙を漉くと思う」とぽつりと言ったことがある。「ほら、元日本兵の※横井（よこい）さんという人は※テーラーだったから、森の中で様々なものを縫い合わせて使っていたよね。僕だったら木から繊維をとって煮て、それで紙を漉いて、そこからいろいろなものを作ると思うな。どんな繊維でもできるんだから」と。

かつて紙は衣類にも籠にも物入れや箪笥（たんす）にも建物にも使った。なるほど紙を漉けばたいていのものは作れるだろう。もしそれが機織り職人であれば、やはりどんな植物からでも糸を紡ぎ、立っている木で簡単な織り機を作り、そこからあらゆる生活必需品を作るだろう。手仕事とはこうして、単に「手でする仕事」という意味ではなく、一方ではおのれの全身と、もう一方では自然そのものと、深くかかわってする仕事のことをいうのである。

第四に、「手仕事」によって作られたものの特徴とはすでに見たように「素朴な味わい」などではなく、じつは本来の生産現場では、機械製よりはるかに精巧で丈夫なものを結果する。ただしそこには「手間」と「時間」という、近代ではもっとも贅沢（ぜいたく）なものが入っているのだ。

（田中優子（たなかゆうこ）「布のちから　江戸から現在（いま）へ」より……一部省略等がある。）

（注）・媒染＝ここでは、染料と繊維とを結びつける薬剤のこと。
・横井さんという人＝太平洋戦争終結後も二十八年間、グアム島のジャングルで生活していた横井庄一（よこいしょういち）氏。
・テーラー＝男子服専門の仕立て業。

Step 2

〔問1〕本文中、A価値観とありますが、これと同じ意味で使われている「観」を含む熟語を、次のア〜エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　観客　イ　景観　ウ　人生観　エ　観光地

Step 2

〔問2〕本文中、B容易には破けないとありますが、手漉き和紙が「容易には破けない」のはなぜですか。その理由を文中の言葉を用いて、簡潔に二つ書きなさい。

Step 2

〔問3〕本文中の□にあてはまる最も適切な語を、次のア〜エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア　メリット　イ　リスク　ウ　ハードル　エ　チャンス

Step 3

〔問4〕 本文中、C自然の偶然性に身をゆだねるとありますが、紙漉きの場合、「自然の偶然性」には、具体的にどのようなものがあると筆者は考えていますか。文中から二十字でそのまま抜き出して書きなさい。

Step 3

〔問5〕 本文中、Dその方法とありますが、これは機織り職人の場合、どうすることですか。文中の言葉を用いて、五十字以内で書きなさい。（句読点やその他の符号も一字に数える。）

Step 3

〔問6〕 本文中、手仕事の価値を筆者はどのように考えていますか。筆者の考えとして、最も適切なものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 作り手が、多くの時間をかけて自然の不規則性を完全に取り除き、手間を惜しまず、おのれの身体すべてを使って、精巧で丈夫なものを作り出すこと。

イ 作り手が、自然そのものと深くかかわりながら、自然を支配し、おのれの身体すべてを用いて、多くの手間と時間をかけ、精巧で丈夫なものを作り出すこと。

ウ 作り手が、自然と同化し、その中にある魅力を取り入れながら、おのれの全身を使い、手間と時間を費やすことによって、均一かつ精巧で丈夫なものを作り出すこと。

エ 作り手が、おのれの全身を使って、自然そのものと深くかかわり、その不規則性を個性として取り入れながら、手間と時間をかけ、精巧で丈夫なものを作り出すこと。

□

【和歌山県】

〈Note〉

# 第六講　論理的文章の読解⑤

## Step 1

一

解答

1、ウ　2、イ　3、ア　4、a、一対一の関係性　b、誰か他人が与えた物の役割、物の意味付け　5、存在が意識にのぼらないくらいに物と親密な関係になり、物の機能性を十分に発揮させるとともに、時間の経過につれてその物が秘めている様々な用途を発見していく（75字）（同意可）

解説

1、「用の美」は、「使用して見出される美しさ」があるという考え方であり、その考えには「単に美の新しい領域を開拓したということ」だけでなく、「様々な意味での生活の全体性の回復」ということが込められていると述べている。

2、「〜される」という、受け身の意味で使われている。アは可能、ウは尊敬、エは自発。

3、「意識にのぼって」いない、「忘れられている」と逆で、愛でる対象として認識している状態を考える。

4、「用の美」と反対の考え方を表している。aは、「物」と「用途」の関係に着目して、「一つの物が様々な用途を秘めていたり…同じ用途がいろんな物に解放されていたり」という関係と逆の関係をおさえる。bは、直前の文で、「自分と物との距離感をゼロから取り戻す」ために、「束縛されないで」としているものをおさえる。

5、「使う」ということは「時間の経過を念頭に置いている行為」であり、「発見の過程、プロセス」が「『使う』『使いこなす』ということ」であると述べている。また、「使いこなす」ということについて、「人と物との関係の親密さを表す」として、「物の機能性が本当に発揮されて…その存在が意識にのぼらないくらいに自分にフィットしている」と述べている。

Step 2・3

二

解答

〔問1〕ウ　〔問2〕繊維があらゆる方向にからみ合っているから・要らないごみ類が入っていないから（それぞれ同意可）　〔問3〕ア

〔問4〕空気の湿気や風や石の重さや太陽の状態など　〔問5〕どんな植物からでも糸を紡ぎ、立っている木で簡単な織り機を作って、あらゆる生活必需品を作り出すこと。（49字）（同意可）　〔問6〕エ

解説

〔問1〕「見方・考え方」を意味している。

〔問2〕「なぜこういうことになるのか…」から、「全身のしている仕事」であることによる効果、「またこういうことでもあった…」から、「腕を動かしながら…ごみ類を見分けている」ことによる効果をおさえる。

〔問3〕「コストダウン」が目的であるのに「費用がかかること」から、いいところがないことを意味する文脈になる。

〔問4〕紙を漉き、「水を切るには…石を置いて何日か放置する」「干す時には…天日で乾かす」という作業で、人間には「コントロールしきれないもの」に「身をゆだねている」と述べていることに着目する。

〔問5〕「一個の人間が自然に立ち向かうことで…ものを作り出す」という方法を、機織り職人の「手仕事」からまとめる。「紙を漉けばたいていのものは作れるだろう」に続いて、作業の内容をくわしく説明し、「自然とひとりの人間」が深くかかわる仕事であるとしている。

〔問6〕「手仕事とは何か」の説明で、「第二に」として、「自然力を征服することではなくて、自然の偶然性に身をゆだねること」であり、「自然の不規則性」を「個性」として取り込んでしまうと述べている。また「第三に」として、「一方ではおのれの全身と、もう一方では自然そのものと、深くかかわってする仕事」であると述べている。さらに「第四に」で、「作られたものの特徴」として、「機械製よりはるかに精巧で丈夫なもの」であり、「『手間』と『時間』」などの「贅沢なもの」が入っていることを挙げている。